

書評

田所清克 著 『ブラジル北東部の風土と文学』

評者 山本 アナ・クリスチーナ・アケミ

皆さんはブラジル北東部と聞いて、どのような情景を想像されるでしょうか。多くの方は、そもそもブラジルが行政区分上5つの地域に分けられているをご存知ないのかもしれませんが。

日本でもカーニバルの本場として馴染みのあるリオ・デ・ジャネイロや、南米一の産業都市であるサン・パウロが位置する南東部。かの有名なアマゾン川が流れ、国土のおよそ半分（45.2%）の土地を占める北部アマゾン地域。5つの地域の中で唯一海岸線に面していない、パンタナル大湿原地域を有する中西部。ヨーロッパ移民の要素が色濃く、ブラジルで最も寒冷な南部。そして本書で取り上げる、「もう一つのブラジル」と称される北東部である。本作品の著者、田所清克教授は次のように述べている。「真にブラジルを認識しようとするれば、北東部の社会・文化事象に対する理解は不可欠な前提となる。たとえば、貧困や飢餓、過疎化現象、都市および土地問題などのブラジル問題のひとつを見ても、北東部との関わりは深く、この地域を抜きにしては語れない。」（まえがきより）



9つの州からなる北東部は、すべてが大西洋に接している。同時にそこは3つの地域で構成されており、その一つが森林地帯である。バイーア州の沿岸からリオ・グランデ・ド・ノルテ州へと広がっている、帯状の土地を指し、年間を通して雨がよく降る。2つ目は重要な農業地帯であるアグレステ。生産物の中でも、とりわけフェイジョン豆、とうもろこし、マンジオッカ芋（キャッサバ）を沿岸部に供給している。3つ目のセルトン（奥地）地帯は、北東部のほぼ半分を占めており、ほとんど雨が降らず、一年を通して気温が高い。このように一口に北東部といっても、場所によって全く違った気候・様相を呈し、風土や文化も異なっている。郷土性豊かな北東部文学もそうした風土や文化を抜きにして語り得ない。

本書の第一章では、その北東部文学を含めた自然および文化・風土を、多くの写真や地図を載せて紹介している。第二章では、ブラジル地方主義文学の位置・定義づけ、他の時代の中でみる北東部文学について記述している。本書の真骨頂をなす第三章から最終章の第六章までは、それぞれ4名の作家、すなわちロマン主義時代の文豪で『イラセマ』などを著したジョゼー・デ・アレンカールや、処女作『砂糖園の子』を含む「サトウキビ連作」を世に問うたジョゼー・リンス・ド・レーゴ、『干からびた生活』を上梓したグラシリアーノ・ラーモス、そして本書の著者とも交流のあった、20世紀のブラジル文学における最も重要な作家の一人であるジョルジェ・アマードの作者略伝や主要な作品について考察を行っている。すでに邦訳された作品も多数紹介されているので、ブラジル文学に興味のある方はもちろん、これから文学の世界に足を踏み入れようとしている人々にとっては有効な道標となるだろう。

ブラジルでは、昨今ムズィカ・セルタネージャ（セルトン音楽）が流行している。この音楽ジャンルで注目を浴びている北東部出身の二人組の歌手、ゼゼーとルシアーノの人生を綴った映画が公開され、その続編も制作されていると聞く。この映画は日本でも上映され、話題を呼んだ。セルトン音楽では、文学同様、北東部の情景や風土を歌詞の中心に据えて歌われているため、北東部セルトンの過酷な自然条件の中で暮らす住人たちの共感を得る一方で、彼らのアイデンティティの拠り所ともなっている。

本書『ブラジル北東部の風土と文学』を手にとれば、サッカーやボサノヴァとは一風変わった、「もう一つのブラジル」を感じ、この国の新しい魅力を発見して頂けるのではないかと思う。

やまもと あな・くりすちーナ・あけみ

（大学院博士後期課程 外国語学研究所 異言語・文化専攻）